

Takara Mono

News

vol.12

たからものにカーす

ふくしまでがんばるひと⑦

特定非営利活動法人 バンダハウスを育てる会 事務局

理事長 山本 佳子さん

副理事長 菊田 洋子さん

笑顔の花が、
ぱっと咲く部屋。



福島市の市街地から車で約十分。蓬萊地区と呼ばれる緑豊かな住宅街に、ごくありふれた一軒家がある。少しだけ変わっているとすれば、玄関にかわいいパンダの看板が見えることだろうか。この家は「パンダハウス」と呼ばれ、県立医大病院との連携で、小児がんなどの難病と闘う子ども、そしてその家族に「もうひとつの我が家」を提供している。その活動内容を伺いに、母体であるNPO法人パンダハウスを育てる会、理事長の山本佳子さんと副理事長の菊田洋子さんを訪ねた。



小児がんの現状について

小児がんは小児の病死原因の第一位で、現在も約一万七千人の子どもたちが闘病を続けている。「治るがんと」言われているもののその診断は難しく、高度で濃厚な治療が必要とされる。そのような中でも、難治性の小児がんに対して、最先端の治療方法を取り入れているのが福島県立医科大学付属病院の小児腫瘍部門だ。その技術力の高さで、県内外の白血病を中心とする小児がん患者を受け入れている。

治療には「当たり前」が必要

しかし、治療に必要なのは最先端の技術だけではない。「日常性が必要なんです」と山本さん。「いくら病院が気を配っていたとしても、子どもさんや家族の方にしてみれば必ずしも落ち着ける場所ではありません」。決して広くはない病院の相部屋では、走り回って遊ぶこともできず、大きな声で笑うこともできず、泣きたいときに泣くこともできない。特に、遠方から



理事長 山本 佳子さん

来たお母さんは慣れないビジネスホテル暮らしと病院との往復で心身ともに疲労困憊し、子どもに優しく接することが出来なくなったり、治療意欲が削がれたりすることもあったという。「そういうときの日常性のプラス効果というのは、とっても大きいんです」。病院で出される番茶ばかりを飲んでいたら付き添いのお母さんに、飲み慣れた煎茶を差し入れたところ「あの温かい一杯がどれだけ嬉しかったか」と後に言われたことがあったという。

「だからね、朝起きて顔を洗っておはようって声を掛け合って、ご飯つくって食べて、学校行ったり会社に行ったり……。そういう日常を通して「ほっと」と息つける場所が病院の近くにあればいいな」と菊田さん。だって、当たり前の生活を提供するのが私たち主婦ですもの。

このようにパンダハウスは、病院の近くの我が家として、付き添いのご家族が体を休めたり、また、子どもとの一時外泊で、心の安らぎを取り戻してもらったための施設である。

イキイキがいつばい

病院ではつらそうな表情しか見せない子どもも、パンダハウスでは笑顔の花をばつと咲かせる。病院と同じように点滴をぶら下けていても、びよんびよんまではいかないんですが、ひらひらと輝くように動き回ります。菊田さんも目を輝かせながら話す。

楽しみにしていた外泊の日に熱が出てしまったが「パンダさんだったらいいよ」という医師の計らいで外泊して遊んでいたら、すっかり熱が下がったこともあるという。病院にいるときの子どもと同じとは思えないほどイキイキして「楽しんでー」。

こうした好例は枚挙にいとまがないが、家族と過ごすのびのびとした時間が、子どもにとっていかに大切なのかを実感できるイベントである。

笑顔のリレー

「でも、家族が元気がないと子どもを支えきれないんです」。山本さんが言うように、支える側のメンタルケアも重要である。

おじいちゃんおばあちゃんがお孫さんの手術の待ち時間、パンダハウスの掃除や草むしり、雪かきまで手伝ってくれたことがあったそうだ。「私たちスタッフとしては、お氣遣いいただいて申し訳ない気持ちでした。でもきつと、気が気でなかったんでしょね」。日常の動作には、そういった気持ちを和らげる効果もあるのだ。

またある時は、お母さん数人が大騒ぎで台所に立ち、おやつ作りをしていたという。スタッフが「ここに来たときくらいゆつくりなさってば？」と声をかけたそうだが、「きつとね、みんなでわいわい自慢のおやつを作ることで癒されていたんじゃないかと思うの。だって子どもも笑顔も見られるし」と山本さん。

笑顔。それは、生まれたそばからその空間にいる人のあいたをリレーし、癒しというあたたかい雰囲気といったに似ている。そしてその笑顔が、当たり前の日常から生まれていることに気づくとき、私たちはハッとすることが知らず知らず

隣のおばさんといっしょにやっています

パンダハウスには設立当初からの確固たる運営ポリシーがある。それは「家族への積極的な介入は行わない」ということだ。「なぜならここは、ご家族の第二のわが家だからです」と山本さん。それはつまり、ご家族をお客様扱いしないということ。

だから、病院からの送り迎えや子どもとの世話なども行っていない。「やりませー」ボランティアさんからの積極的な拳手もあった。しかし過剰なサポートは家族の負担を減らす一方で、「パンダハウスに任せていれば心配ない」という、足が遠ざかる原因をも作ってしまう。そこにはもう、家族の日常は存在しない。

「ですから、私たちスタッフは『お邪魔します』という感覚なんです」。ただし「おはようございます」や「天気いいですねー」などの会話は大事にしているという。「隣のおばさんとしてやっています」と笑顔の菊田さん。お隣さんの距離。それは、家族の持つ自己治療力を最大限に引き出すための、最善の距離感なのである。

もうひとつ、ご家族に日常を取り戻してもらったため、大切にしていることは掃除だ。「本当に心を尽くしています」と



ぬいぐるみの分身として利用者全員にプレゼントしているバッジ。応援の意味を込めてボランティアさんがちくちく手づくりしている。

山本さんが語るように、隅から隅まで細かく気を配り、掃除後は利用者の目線で点検を行うという徹底ぶり。感染症予防のための衛生面はもちろん、快適に過ごしてもらったためには欠かせないポイントである。掃除が行き届かない施設では利用者の心が荒れ、備品を壊したまま出て行くケースもあるそうだ。しかしパンダハウスでは、物が無くなったという、きつと、私たちの気持ちが伝わっているんでしょね」と菊田さん。





前代表である堀越さんのお子さんの入院時、お見舞いにもらったパンダのぬいぐるみが、他の子どもたちの人気者に。それがパンダハウスの由来となった。

パンダハウスが出来るまで

それは、前代表である堀越さんの発案だった。自身の子どもが県立医大病院で治療を受けた経験を通して、施設の必要性を痛感したという。そして、その考えに賛同した山本さんや菊田さんら立ち上げメンバーが、いち早く資金集めに動き出した。目標は三年で三千万円。しかし日本で初めての試みだったため、当初は活動への理解が得られなかったり、宗教と間違われたりするなど、空回りの日々もあった。

ところがどこい母は強し。ノウハウもないまま、街頭募金やピアノコンサートやチャリティーバザーなどが集まるイベントを精力的に開催し、マスコミの取材などを通じて声をあげ続けた。その結果、ボランティアメンバーもみるみる増え、二年ちよつとで目標をほぼ達成。きつと

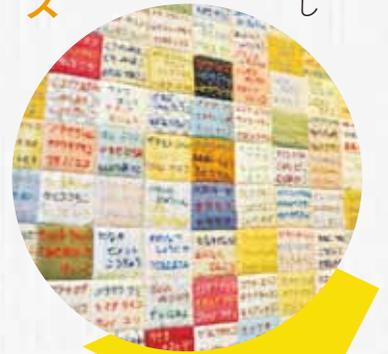
運が良かったのね」と山本さん。しかしそれは決して運ではなく、ひたむきな努力から生まれた必然の結果に違いない。母は、偉大だ。

これからのパンダハウス

平成九年十月のオープンから十六年。利用者数は三千三百五十五家族、延べ人数で二万人を超えた。感謝の手紙もたくさん寄せられている。

しかし山本さんたちは歯がゆい。現状では三部屋しかないため、場合によっては「本意ながらお断りしている状況」だからだ。また、利用日数も原則七泊八日となっているため、大きな荷物を持って移動せざるを得ない場合もある。「長期で使っていただけなのにが本当に申し訳なくて」と山本さん。「だから今、増床計画を進めているところなんです」。この先、医大の高度先進医療を求め、国内外からの需要拡大が予想されることも理由のひとつだ。

資金集めの目標は、二〇一六年までに五千万円。間取りのプランも着々と練られている。「大きなひとつよりも小さなふたつで」と菊田さん。現在の規模を二つ並べるイメージだ。規模が大きくなると力関係が生まれ、リラックスや癒しの効果が薄れてしまうのだそつだ。



『メモリアルキルト』パンダハウスが出来るときにご協力いただいた方のお名前が刺繍されています。

地域の力を子育てに

「子育て支援の一環としてこの活動も支えて欲しい」。それが会としての思いだという。「昔は、自分は自分の子どもだけを育てていけばいいと思ってました」と菊田さん。しかし最近では、「みんなに育てられている」という考えに変わった。「例えば子どもが熱出したとき、職場のみんなが心配してくれて、早退させてもらったりしたでしょつ」。

そう、私たちは勝手に一人で育ったのではなく、両親だけに育てられたのではなく、地域や社会に守られ、時として叱られながら大きくなったのだ。「子どもは私たち全体の宝なんです」と山本さんは言う。

私たち大人もかつては宝としての時代があった。ならば、今度は私たちひとりひとりが、恩返しをする番なのではないか。子どもたちの、笑顔のために。そしてそのチャンスは、きつとこの瞬間なのだろう。

賛助会員加入と
寄付金の
お願い

ボランティア&寄付募集



▶ 賛助会員年会費 ・ 個人(1口) 3,000円(1口以上) ・ 団体(1口)10,000円(1口以上)

▶ 年会費・寄付金振込先 郵便振替口座番号:02200-9-110330
郵便振替口座名義:特定非営利活動法人パンダハウスを育てる会

はじめての方も
大歓迎!!! ボランティア体験会やっています!

おそうじ、庭の手入れ、クリスマスプレゼント作り、メモリアルキルト作り、パンダパズル作り、バザーなどたくさんのお仕事があります。(毎月第一土曜日10:00~12:00)



『パンダハウス』

〒960-8157
福島市蓬萊町八丁目15番地1
Tel.Fax 024-548-3711
E-mail pandahouse@oasis.ocn.ne.jp
http://www6.ocn.ne.jp/~panda011/



発想から発送までお客様のニーズにお応えします。

タカラ印刷株式会社

〒960-8141 福島県福島市渡利字絵馬平86-9
TEL.024-526-4303 FAX.024-526-4302
E-mail sky@inaka.co.jp http://www.takara.inaka.co.jp/



適用範囲:印刷・製本・社会調査